

うつみ農園

～まちなか農園で地域を豊かに～

うつみ農園では、いちご・トマト・キュウリなど多種多様な野菜を栽培しています。自然と人との交流を大切にしながら地元から愛される農園づくりに取り組んでいます。

うつみさんのこだわり

1.畑から食卓へ

うつみ農園は、京都山科のまちなかで少量多品目の野菜を育て、生産から加工・販売まで六次産業を一貫して行う農園です。自動販売機やキッチンカーでの販売、収穫祭やいちご狩りなどのイベントを通じて、農業を身近に感じられる工夫をしています。また規格外野菜も活かし、環境にもやさしい取り組みを続けながら、農家と消費者、人と自然をつなぐ新しい農業を実践しています。



2.地域に寄り添った農業

うつみさんは三代目として農園を継ぎ、先代の「市場向けの規格品中心の農業」から、地域に必要とされる農業へと転換しました。食べられるのに捨てられていた規格外野菜も積極的に販売し、顔が見える地域の人にまっすぐ届ける仕組みづくりを進めています。また、子ども達が安心して食べられる野菜を届けたいという思いから、多品目栽培や年間を通した供給体制の整備に取り組み、地産地消を実現する農業を目指しています。

3.野菜作りの思い

うつみさんの野菜作りの中心には、「おいしくて安全で、毎日手が届く価格の野菜を届けたい」という思いがあります。野菜そのものの美味しさを引き出すために、栽培方法の工夫や細かな管理を欠かさず、一つひとつの野菜に丁寧に向き合っています。新たな品目には資材や管理の準備が必要なため、品質を守りながら無理のないペースで少しずつ広げていく方針です。こうした丁寧なこだわりこそが、うつみさんの野菜づくりを支えています。



うつみ農園の活動紹介

まちと農の関係をあたためる



農業を通して、人と人、人と自然がもう一度近づけるような場を作ることが目的です。地元の方々や子どもたちとの関わりながら、畑を「地域の共有の風景」にしていきたいと思っています

具体的な活動

食育

子どもたちに畑体験を通して「食べることの原点」を感じてもらう活動

- ➡ 中学校のチャレンジ体験などを積極的に受け入れ、未来の農業の種をまきながら農業に対して興味を持ってもらえるような取り組み

食育は未来の食を守る大切な一步

環境問題

気候変動や環境の変化に対応しながら、持続できる農業を目指している

- ➡ 化学肥料や農薬を必要最小限に抑え、堆肥や土づくりを重視

小規模ではあるが、できるだけ自然に寄り添う形で育てている

農園の経営について、野菜作りへの思いについて

農園の経営

山科のまちなかでキュウリ・トマト・なす・いちご・お米などを栽培。

野菜作りへの思い

小規模ながら、味や鮮度を大切にし、できるだけ自然に寄り添う形で育てている。経営の基本は「信頼」なので、顔の見える関係を築くことで、野菜1つひとつが人の暮らしを支えていることを実感できる。

今後の展望

うつみさんに、うつみ農園の今後の展望や目指す姿をお聞きました。

「今後の展望としては、まず規格外品の利用を積極的に行っていきたいです。もともとは漬け物の販売を考えていたのですが、法律の改正によって昔のように農家が漬け物を販売することが出来なくなっていました。そのため、今は販売のライセンスを取得するために動いています。また、まちなか農業を活かして、山科の地域の皆さんとの繋がりを大切にした農園づくりを目指したいです。食育活動や地域との交流が未来の農業への種まきになると考えています。」



取材から学んだこと

うつみさんとお話していく中で、終始育てている野菜に対して愛情をもって接しているのがとても伝わってきました。日々の手間や工夫を惜しまず、野菜の成長を見守る姿勢から、農業とは単なる作業の連続ではなく、「命を育てる」活動なのだと感じました。

そして食育や地域と農業の関わりについても真剣に考えていらっしゃったのが印象的でした。農業は食を支えるだけでなく、人と人を結び、地域の文化や暮らしを形づくる大切な役割を担っているのだと改めて気づかされました。

この取材を通じて、自分たちもそのような活動をしている人たちの思いや取り組みをもっと詳しく知り、同年代の人たちに伝えていくことが重要だと感じました。農業や地域の未来を考えることは、決して特別な人だけの課題ではなく、私たち一人ひとりが関わるべきテーマなのだと思います。

